
Another World

アキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Another World

【Nコード】

N2528BA

【作者名】

アキ

【あらすじ】

全校高校弓道大会個人戦三連覇の懸った大舞台の最後の一射で神崎怜は異世界に召喚されてしまう。召喚された世界で怜はどう生きていくのか。処女作です。いろいろ至らないところもあると思いますが寛大な心でお読みください。作者は好きなweb小説の影響を多大に受けている可能性がございます。あきらかに他作品の盗作と思われるところがありましたら即刻言ってください。作者がその部分をまずいと思えば改稿いたします。

序章 神崎怜

弓を構えて矢を番える、弦を引き絞り矢を放つ。

タンツ・・・

「凄すぎじゃない。」

「全国三連覇が懸った一射目で中心かよ・・・」

そう、ここはインターハイ弓道大会個人部の決勝の舞台。神崎怜はその三連覇の懸った舞台で全く緊張せずに弓を引いていた。

タンツ・・・

タンツ・・・

怜は全く同じペースで的を射ていく。

観客は怜の射に魅せられて息をするのも忘れそうだ。

タンツ・・・

「次当てたら三連覇よ・・・」

観客が注目する中、怜が最後の射に入り始めたとき

会場に異変が訪れた。

怜の足元に魔方阵が描かれて光りだす。

観客は呆然としてその光景を見ている。

怜も足元から光が溢れていることには気づいたが射に入り始めた以上まるで意に介さない。

そして、怜が最後の一射を放とうとしたその瞬間、強烈な光に会場は包まれた。

数十秒ほどして皆の目が見えるようになったときには、

会場に神崎怜の姿はなかった。

序章 神崎怜（後書き）

読んでくださってありがとうございます。処女作で拙い表現等あると思いますが、寛大な心で見守ってくれと嬉しいです。毎回見直してから投稿するつもりではありますが誤字脱字等を発見されたら教えていただけると幸いです。

序章 クリス・バルディア

「殿下！困ります！今日の召喚の儀には必ず出席してくださいと前から申し上げていたではありませんか！」

「だからそれには俺も前々から出ないと言っていただろう。大体俺は王位を継ぐ気はないし、そもそも召喚の儀は気に入らないんだ。」

「殿下、私にはそれを言っても構いませんが絶対他の人に聞かれないうちにしてくださいね。最悪不敬罪で処刑されますよ。」

「わかつているさ。そもそも王宮内で信用して話をしている相手なんてアハト、お前くらいだ。」

「はあ……。分りましたよ、とりあえず今日は償還の儀に出てください。今まで言ってますでしたが、実はユウラ様が“視た”らしいのです。」

「バアさんの星視と関係があるのか。どうりでいつにもましてお前が出るように言うわけだ。仕方ない、今すぐ行けばギリギリ間に合うな。」

そう言っただけ俺はアハトを従えて謁見の間へと向かう。

「遅いぞクリス」

「遅れてすみません。父上」

「まあいい、もうじき準備も終わる。後ろで待ってる。」

そう言われて俺はこのバルディア帝国の王であり俺の父であるガスト・バルディア王の後へと移動した。

謁見の間には他に騎士団長であるユビタ・アルメノスと騎士団の上位騎士達、魔導師団長であり今回の召喚の儀を行うサハナ・ルシエと魔導師団の上位魔導師達がいた。

そこでふと疑問に思ったので父に聞いてみる。

「キースはいないのですか？」

「第一王位継承者である貴様がいるのだから問題ない。」
そう言われて俺は内心で苦笑する。

（俺は王位継ぐ気はねえってのに・・・）

「陛下。召喚の準備が整いました。」

そう思っていた間にどうやら召喚の儀の準備ができてたようでサ
ハナが報告をしていた。

「召喚を始めろ。」

「ハッ。」

王が促しサハナが召喚魔法を紡ぎ始める。

魔法陣に光が満ちて召喚魔法が発動した

序章 クリス・バルディア（後書き）

読んでくださってありがとうございます。誤字脱字がございましたら言っていただけると嬉しいです。

一章 召喚（前書き）

地の文が辛いです。頭の中では漫画みたいな感じに展開されています・・・。

一章 召喚

「一章」 召喚

（これで最後・・・）

最後の一射を引き絞る。

直前、自身の足元が光りだした。

（なんだこれは。けど、関係ない。）

光が強くなってくると怜は目を瞑った。それでも体が覚えているの
での位置はわかる。

だから怜は気付かなかった。矢を放った瞬間には世界が変わってい
たことを。

「ぐ・・・」

王であるガストの呻き声が上がった。

魔方阵に召喚された人物はなぜか弓を構えていて召喚されたときに
矢を放ったのだ。

啞然である。謁見の間に集まった全員が訳がわからない。

「陛下！」

いち早く立ち直った騎士団長が王に駆け寄る。

「そのものを捕えろ！」

次に正氣に戻った魔導師団長は召喚されたものを捕えるように指示する。

「！」「！！」「！！！」

その声で漸く騎士達は動き出す。

「がっ！」

召喚された者はさして抵抗することなく捕らえられた。

その光景をクリスはずっと傍観していた。

（これか！バアさんの言ってた事はこれの事か！）

だがクリスがそんなことを考えている間にも召喚された者は地下牢へと連れて行かれている。

（さて、どうしたものかな。つと、第一皇子の方も演じないとな）

「サハナ、すぐに父上の治療にあたれ、誰か一人は治療班長を念のため呼びに行け、ユビタは地下牢の監視体制を整えろ。」

（とりあえずはこれでいいだろう。それよりあいつを助け出す算段を立てるか。）

「くそっ！なんだお前ら！放しやがれ！」

「うるさい。この反逆者が！」

「~~~~~!」

（反逆者だ！？ 訳わかんねえこと言つてんじゃねえよこいつら。）
 そんなやり取りをしている間にも、地下へと辿り着き乱暴に牢に入れた。

「入ってる。明日には不敬罪で公開処刑が待ってるだろうよ。」

そう言い残して騎士は出て行った。おそらくさっきの部屋へ戻るのだろう。

「くそっ！なんなんだここは！不敬罪で処刑！？冗談じゃない！俺が何したってんだ！」

ガンツ！！！！

怜は格子を蹴りつけるがビクともしない。王城の地下牢なのだから当然である。そのことで少し冷静になったのか現状を考える余裕ができた。

（とりあえずここがインハイの会場じゃないのは確定だ。だとするとここはどこだ。日本語を話していたけど日本でこんなことがされるはずないし何より『不敬罪』なんて法律は無かったはずだ。だとしたらどこだ……。くそっ。牢屋なんかいたら情報が少なすぎてわからねえ。）

怜はとりあえず現状の把握を試みるがやはり牢屋の中からだと情報がなさ過ぎてとてもじゃないが把握はできない。

（とりあえずわかつていることは

1．ここは日本ではない。

2．俺はこのままだと処刑される。

これだけか……。)

「くそっ！」

そう言っつて格子を蹴りつける。無駄だと分かっているけど怜はやらすにはいられない。

そんな怜に誰かが声をかけてきた。

「おーおー、荒れてるねえ。」

「誰だ？」

「クリス・バルディナ。この国の王子だよ、一応ね。」

「で、その王子様が何しに来たんだ？」

「相談だよ。俺と一緒にこの国から逃げないか？」

一章 召喚（後書き）

読んでいただきありがとうございます。誤字脱字その他表現のおかしいところ等があれば教えてくれればうれしいです

一章 逃亡（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

一章 逃亡

「この国から逃げるだ？そんなこと出来るのか？」

「もちろん。俺はこの城の抜け道を全部知っているし、この城から抜け出した後のこともちゃんと考えているさ。」

「・・・」

（どうする、乗るか？俺を助けることでこいつにあるメリットは何だ？俺は近日中に処刑されるらしいから外に連れ出して殺すことに意味和はない。だとしたら本当に俺を助けることが目的か？）

「あー、悩んでるところ悪いけどさ、処刑が明日に決まったから逃げるなら今夜しかチャンスが無いんだ。逃げるにもある程度準備が必要だから今すぐ決めてくれないかな。」

「逃げる。」

（ここで捕まっても明日殺されるんだ。なら罠だろうと抜け出したほうがマシだ。）

「いい答えだ。」

怜のその答にクリスは顔を綻ばせた。

「なら今夜また来る。いつでも逃げれるように準備しておいてくれ。」

「準備なんてストレッチくらいしか出来ねえよ。」

怜の返答にクリスはクツクツと咽を鳴らす。

「弓。」

「ん？」

「俺の弓はどうした。」

「俺が回収した。逃げる時に持ってきてやるよ。」

そう言い残してクリスは上階へと去って行った。

（かなり警戒されてたな。まあいきなり異世界に連れてこられて牢の中だ、無理もないか。）

クリスは一人苦笑するも足取りは軽い。

（いよいよだ。ようやくこの国から出ていく時が来た。）

「殿下。」

そんなことを考えていたクリスに騎士団長が声をかけてきた。

「奴の様子はどうでしたか？」

「だんまりだ。未だに状況が把握できていないようだ。」

「そうですか。殿下は奴のことをどう思いますか？」

「どう、とは？」

「私は奴が弓を持っている間はただならぬ気配を感じました。しかし、我々が捕らえた時にはその気配がまるでなかったのです。殿下は感じませんでしたか？」

「俺は美しいと思ったな。それより地下牢の見張りの編成はどうだ？」

「？問題ありません。」

話題を変えたクリスに疑問を思ってもユビタは答えた。

夜

（さて、逃亡生活の始まりでしょうか。）

準備を終えたクリスは地下へと向かう。

地下牢の前には二人の見張りがいる。そこへ近づいたクリスはおもむろに声をかけた。

「奴の様子はどうか？」

「ッ、殿下。はい、最後に見た時はなにやら体操をしているようでした。殿下はなぜこちらに？それにその荷物は？」

「ん？ああ、そろそろこの城から抜け出そうと思ってな。」

「はっ？ガッ」

「殿下っ！なに、ぐふお。」

クリスの発言に驚いている間にクリスは二人の見張りを気絶させる。見張りから鍵を盗り牢の中へと入っていく。

「お待たせ。何してんだ？」

のんびりしている暇はないのだが聞かずにはいらなかった。怜はヨガをしていた。

「準備運動だ。それより急がなくていいのか。」

「っ！ホラ、弓だ。行くぞ」

「さんきゅ。」

礼を言つて弓を受け取ると怜は立ち上がってクリスに尋ねた。

「抜け道まで行くのに見つからずに行けるのか？」

「大丈夫だ。地下牢の中に抜け道があるからな。」

その答を聞いて怜は啞然として訊いた。

「なんで地下牢の中に抜け道があるんだよ・・・」

「確か侵略されて王族が捕まった時にどうか聞いたな。」

そう言いながらクリスは石壁を調べている。と、探し物を見つけたようで石壁の一ヶ所を押し込むと牢の隅の壁がずれて階段が出てくる。

ゴゴゴッ

（地下牢にこんなもんつくんなよ・・・）
と、怜が呆れているのをよそにクリスは階段を下っていく。

「おい、地下なのになんで階段下ってんだよ。」
「この城が高台にあるからだよ。この階段で麓まで降りる。それよりこれ着とけ。お前の服装は目立つ。」

そう言つてクリスはローブを投げて寄こした。怜は袴の上からローブを着た。

「やっと外か。」

「俺もあんな長いとは思わなかった・・・」

かれこれ2時間かけて地下道を歩いた二人は漸く外に出た。外は満天の星空でどこか幻想的な風景だと怜は感じる。
ふと後ろを見ると高い城壁がある。

「よし、とりあえず俺の協力者のところまで走るぞ。」

そう言っつてクリスは走りだす。 怜もクリスについて走り出すがふと違和感を感じた。

2時間歩きっぱなしだったにもかかわらず全く疲れていないのだ。

（なんだ？俺はそんなに体力あるほうじゃないのになんで2時間も歩いた後に走っているのに全然疲労を感じないんだ？）

疑問に思いながらも今考えても答えの出るものでもないのとおとなしくクリスに付き従っていく。

一章 逃亡（後書き）

誤字脱字その他表現のおかしなところ等があれば言うただけ
ばありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2528ba/>

Another World

2012年1月8日19時52分発行